

# Impersonal *It* 構文と Existential *There* 構文の話し手と捉え方

湯本 久美子

yumoto@ccs.aoyama.ac.jp

キーワード: Impersonal *It* 構文 Existential *There* 構文 話し手 捉え方 抽象的場面設定

## 要旨

本論は、Langacker (2011:213)の提言に基づき、“abstract setting”を示していると考えられる Impersonal *it* 構文と存在的 *there* 構文の関係を考察する。両構文には話し手/概念化者の言語化は文法的に必須ではないという特徴もある。指示的意味の強い外部/内部照応の “it”と所格/直示的 “there”の基本的性質そして有標用法の分析を出発点とし、各々の構文の特徴を考察することにより、それぞれの構文において、話し手はどのように概念化者としての自身をそして事態を捉えているのかを明らかにする。結果として次の4点を提案する: ①二つの構文は各々の指示的用法の意味を受け継いでいる、②二つの構文には事態の非能動的捉え方が共通している、③話し手は Impersonal *it* 構文においては一般化された観察主体として、そして存在的 *there* 構文においては特定の顔を持つ観察主体として自身を表現している、④指示的 “there”から存在的 *there* 構文の“abstract setting”への変化には指示焦点のシフトというメトニミー的動機づけがあると考えられる。

## 1. はじめに

本論の目的は、Langacker (2011:213)<sup>1</sup>が研究課題として挙げている Existential *there* 構文と Impersonal *it* 構文の関連についての試案提示である。下記の Langacker (2011:208)の例文が示しているように、フランス語では “Il”が英語の存在的 *there* 構文そして Impersonal *it* 構文の両方に対応していることがその疑問の発端のようである。

First, I have not considered “existential” *there* and how it relates to impersonal *it*. In other languages, the distinction made in English is neutralized, e.g., French *il* translates as *there* in (40a). At present I can offer only the vague suggestion that *it* tends to be more abstract and more inclusive than *there*.

Langacker (2011:213)

(40) a *Il existe des pneus qu'on a pas besoin de gonfler.* b *Il est vrai que Jean ne la connaît pas.*

‘There exist tires that don’t need inflating.’

‘It’s true that John doesn’t know her.’

Langacker (2011:208)

分析対象である Impersonal *it* 構文とは“impersonal *it*” (Langacker 2011:179 の用語) を主語とした下記の(1~7)の構文を指す。そして Existential (存在的) *there* 構文とは(8)の “There”を主語と

<sup>1</sup> Langacker (2011)の7節 “Further prospects”には今後の課題として3テーマが挙げられている。一つ目が本論のテーマである Impersonal *it* 構文と Existential *there* 構文の関連、二つ目が It 分裂文、三つ目が目的語の位置にある “it” (She resents it very much that she hasn’t been promoted. I love it when you do that.)である。It 分裂文に関しては湯本(2014)で「既成事実効果」・「個人的責任回避機能」という角度から考察を試みている。

し “be”動詞を持つ構文のことである。

- (1) It is obvious that my novel will never be published. Langacker (2011:179) 下線は筆者による
- (2) It's hard to wash a cat. ibid.
- (3) It seems that the fire started in the attic. ibid.
- (4) It's embarrassing when you can't remember someone's name. ibid.
- (5) It's in April that we go to Japan. ibid.
- (6) It is very peaceful without the children around. ibid.
- (7) It rained last night. ibid.
- (8) There was a man shot last night. レイコフ(1993:580) 下線は筆者による

Impersonal *it* 構文の “it”そして *There* 構文の “there”については意味の無い “dummy subject”という見方がある。例えば、Huddleston and Pullum (eds.) (2002:1391) は “*There*<sub>pro</sub> functions only as subject or raised object, and can fill the subject position in interrogative tags: *There is something wrong, isn't there?* It is comparable to certain uses of the pronoun *it*, which can also serve as a dummy subject (e.g. in the extraposition construction *It's a pity we missed them.*)”と説明している。

一方、認知文法(Langacker 2008:5)においては、“lexicon and grammar form a gradation consisting solely in assemblies of symbolic structures.”と主張されている。文法の知識の単位も意味と音のペアを持つシンボルであり、かつ語彙と文法はグラデーションを成す連続体である。そこから、Impersonal *it* 構文の “it”そして *There* 構文の “there”は意味を持つと考えられている。

例えば、Impersonal *it* について述べている Langacker (2011:208)では、命題が導入される空間を“abstract setting”と呼んでいる。典型的な “setting”は“spatio-temporal setting”であるが、そのプロセス理解には関連する “scope of awareness”が伴う。そのような構築物がより抽象化され “spatio-temporal setting”と “epistemic field”の両方を表している、と Impersonal *it* について説明している。“there”についても Langacker (1991:352-353) / (2000:43) は一種の “abstract setting”であり、提示的機能を持っていると述べている。

つまり、Impersonal *it* 構文の “it”そして *There* 構文の “there”は両方とも「抽象的場面設定」の働きをしていることになる。それでは何が共通し、何が異なっているのか、おそらく、このような疑問が冒頭の Langacker の問いの根底にあると思われる。

この疑問の答えを求めるために、本論では Impersonal *it* 構文の “it”と存在的 *there* 構文の “there”は、各々、より指示的意味の強い用法、外部/内部照応の “it”(9/10)と所格/直示的 “there”(11/12)の意味を受け継いでいるという仮説を立て、分析を始める。

- (9) 外部照応 “it” : A.What is it? B.It's my new PC.
- (10) 内部照応 “it” : John gave me a book and I took it. Thavenius (1983:56) 下線は筆者による
- (11) 所格 “there” : Don't leave your shoes there.

(12) 直示的 “there” : There’s Harry with his red hat on.      レイコフ(1993:580)下線は筆者による

最初に、外部/内部照応 “it” と所格/直示的 “there” の基本的性質を明らかにする。その際、無標用法に加えて、有標用法にも注目する。次に、その分析結果を手がかりに Impersonal *it* 構文に特徴的な述語の振る舞いと存在的 *there* 構文の導入実体の特徴等の考察から、各々の構文における話し手と事態の「捉え方」を追求するという方策を用いる。考察の資料として、Impersonal *it* 構文については湯本(2013/2015/2017)、そして *There* 構文については湯本(2019)を用いる。

分析の結果、次の4点を提案する：

- ① 二つの構文は各々の指示的用法の意味を受け継いでいること。
- ② 二つの構文には事態の非能動的捉え方が共通して見られること。
- ③ Impersonal *it* 構文の話し手は自身を顔の見えない大勢の観察者の一人としての観察主体、つまり、一般化された概念化者として、そして存在的 *there* 構文の話し手は自身を観察客体/特定の顔を持つ観察主体として表現していること。
- ④ 指示的 “there” から存在的 *there* 構文の “abstract setting” への変化には指示焦点のシフトというメトニミー的動機づけがあると考えられること。

本論の構成は次の通りである。2節では外部照応 “it”(2.1節)、内部照応 “it”(2.2節)、Impersonal *it* 構文(2.3)を、3節では所格 “there”(3.1節)、直示的 “there”(3.2節)、存在的 *there* 構文を考察する。その分析結果を4節で比較検討し、Impersonal *it* 構文と存在的 *there* 構文の関係について考える。5節は結論を示す。

## 2. Impersonal *it* 構文

Langacker(2007/2008/2011)は、英語非人称代名詞は人称用法と同じ意味を持ち、Impersonal *it* は三人称単数中性人称代名詞が持つ「不明瞭性」(vagueness)と「非境界制限性」(non-delimitation)のあらわれであり、意識の範囲を示し、一般化された概念化者を示す傾向があると述べている。

I suggest that the impersonal pronouns of English display essentially the same meanings they have in personal uses. .... In its various impersonal uses, *it* has its normal value as a third person singular neuter personal pronoun. It (i.e. *it*) is impersonal simply by being construed with maximal vagueness and non-delimitation. Langacker (2007:179-180)

Thought usually considered meaningless (a syntactic “dummy”), this *it* is better regarded as being maximally nonspecific in its reference (Bolinger 1977:ch.4). We might describe it (admittedly impressionistically) as designating the “scope of awareness” invoked as the basis for what follows.

Langacker (2008:390)

I thus propose, as a general characterization, the impersonal *it* profiles the relevant field, i.e. the conceptualizer’s scope of awareness for the issue at hand. The conceptualizer may be identified as the speaker or some other specific individual, but – not surprisingly for impersonal constructions – it tends to be a generalized conceptualizer. Langacker (2011:207)

本節では Langacker の提言をもとに、外部/内部照応 “it” の基本的性質及び Impersonal *it* 構文に特徴的な述語の考察から Impersonal *it* 構文の話し手と事態の捉え方を考える。

## 2.1. 外部照応 “it”

本節では、外部照応 “it”の基本的性質として①広指示定性・②非直示性・③非人間性の3点を確認し、①広指示定性と②非直示性が指示の「非境界制限性」(non-delimitation)と「不明瞭性」(vagueness)へと繋がっていることを述べる。ついで、有標の人間指示用法を検討し、話し手自身の指示として“I”ではなく三人称単数表現を用いることは、自身を他者と捉えて表現していることを説明する。

“it”について Thavenius (1983:158)は、①他のどの代名詞よりも一般性が高く、②かつ例外はあるが人間は指示しないという二点の特徴を持っていると説明している。

最初に、一般性の高さという特徴から見ていく。“it”は目に見えるもののみならず、目に見えない音や匂いを指示することもできる(13)。さらに、音と匂いについて発生源が話し手に明らかでない場合でも “it”で指示できる(14)。また、指示物の大きさにも制限が無い (15)。話し手を中心とする空間的遠近の違いを必ずしも反映しないことから “this” または “that”のいずれで指示されたものでも “it”を代名詞として使うことができ(16)、また所有者も制限とはならない(16)。加えて、現在または過去に関するモノや事柄についても制限を持っていない(17)。

(13) I like this book/sound/smell. = I like it.

(14) What is that sound/smell? = What is it?

(15) I like this ring/car/ house. = I like it.

(16) A: What is this/that? B: It's my/his new PC.

(17) The book is/was interesting. = It is/was interesting.

これらのことから、“it”は、その定指示の幅が非常に広く(広指示定性)、かつ話し手を中心とする直示性を示していない中立の視点(非直示性)を持つ。

この広指示定性そして非直示性から指示の非境界制限性と不明瞭性が出てくると考えられる。その不明瞭例の一つが(18)の環境問題のポスター標語である。(18)について、動詞 “bin”とゴミ箱の絵から “it”の意味は非常に明白だが、それでも “however ‘loose’ the reference of *it* appears”、不明瞭であると Wales(1996:48)は指摘している。

(18) Don't bin *it*, bag *it* (June 1994)

Wales (1996:48)

同様にマクドナルドの広告として有名な“I'm lovin' it.”の “it”はマクドナルドの商品を指示しているのだろうが、どの商品を指しているのかははっきりしておらず、さらにマクドナルドで食べる楽しみを指しているのかもしれないという不明瞭さが残る。逆に、この不明瞭さから解釈の豊かさが生まれ、それが他の広告(例えば、キャノンの広告 “Make it possible with Canon”、JALの広告 “Fly for it!”)にも “it”の使用が好まれる理由なのだろう。加えて、これらの広告の “it”は外部照応なのか内部照応なのかははっきりしない。

上述した例は全て非人間を指示したものであり、“*it*”の二番目の性質「非人間性」の例でもある。「性別を区別しない代名詞を人間に対して用いることは原則許されない」と、Thomas(1995:112)が述べているように、“*it*”は普通、無生物の指示に用いられ、それが無標用法である。

次は有標である人間指示を見ていく。まず、Thomas(1995:114)は“*it*”が人間を指示できる例外として性別のわからない赤ちゃんや死体等を挙げているが、性別がわからない赤ちゃんや動物を指示する場合でも、相手への礼儀を考え“*it*”の使用を避けると説明している。なぜならば、人間指示の“*it*”は人間を「物」に貶める「軽卑」<sup>2</sup>の働きを持つからである。

しかし、不思議なことに、この“*it*”は電話での会話においては全く別な作用を示す。Fillmore(1977:120)は自己紹介で自分を指すことばとして、“*it*, *this*, *I’m*, *my name*”の4つを挙げているが、この順番は聞き手が話し手を同定できる容易さの順番だと述べている。例えば、“*It’s me.*”は聞き手が自分の声を容易に認識できることを知っている場合に使われ、いわば「親密」さの表れである。逆に、“*My name is ……*”は相手が自分の声を聞いたことがないと思う場合に使われるとのことである。

しかしながら、この「親密」の“*it*”とは正反対の用法もあり、それは鈴木(1996:160)が「尊敬の三人称」と呼ぶ用法である(19)。

(19) ホテルの部屋のドアがトントンとたたかれた。それに対する室内の客の発話 “*Who is it?*”

鈴木(1996:155)はもしこのような場合に “*Who are you?*”と問えば、部屋の中の人が、外来者の素性、資格、正体などについて疑いの気持ちを抱き、詳しい情報を求める、やや詰問調の言い方になってしまうと説明している。そして、鈴木(1996:159-160)は、「一般に相手の素性や名前が分からないとき、あるいはそれに自信がないとき、ヨーロッパ語では三人称を使うことが多い。」と述べ、そこから逆に自信があっても、あたかもないかのように見せる使い方が生まれているとしている。そこに含まれる「一種の間接性が、相手に対する遠慮、敬意、尊敬の念といった心理の表明につながってゆく」と述べている。

これらの“*it*”について、指示対象を人間ではないと見る非人間性で整理することもできるかもしれない。しかし、それだけでは十分ではない。なぜなら他にも、自身を三人称単数代名詞で指示する例がある。(20)の電話では話し手Bは自身を “*this*”で受け、三人称単数人称代名詞 “*she*”で指示している。この用法は非人間性では説明できない。ちなみに、相手も “*you*”ではなく “*this*” (または “*that*”) で指示している。

(20) A: *May I speak to Mrs. Smith?*      B: *This is she. Who is this?*

このように三人称単数代名詞で自身を指示する話し手は自分をどのように捉えているのだろうか

<sup>2</sup> Thomas(1995:118)はある人が遊び相手の女性を繰り返し “*it*” で指示することによりその女性を「もの」の地位に貶めたという報道実例を示している。

か。話し手は自身を“*I*”で指示するのが無標なのである。三人称単数代名詞を一人称の価値として用いるミスマッチ現象の根本的な原理を考える必要がある。

この「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」(Gardell and Sorlin 2015:10)は、“*it*”や“*she/he*”のみに見られるものではなく代名詞に共通する性質である。このミスマッチを Collins and Postal (2012:217)は“*pronominal imposter*”と呼び、その例として“*nurse we*”を挙げている。“*nurse we*”は「*I + you* の inclusive」ではなく、意味的には二人称である。子供に向かって“*Aren't we going to tidy our room today?*”と言いながらも、実際には子供のみが子供部屋の整理整頓することを依頼しており、“*we*”の実際の指示は聞き手のみである。“*we*”の文法的形式と指示的価値である「聞き手」との間のミスマッチである。

このような「文法的形式と指示的価値のミスマッチ」は“*I*”を除く全ての英語人称代名詞に非常に頻繁に見られるものである(湯本 2015)。複数人称代名詞“*we*”、“*you*”、“*they*”は指示幅が変化することにより話し手、聞き手、それ以外を含めるのか、含めないのかを表現できる。そしてそのことにより個々の人間の特定性を低め「あなたも」、「皆が」そして「誰もが」などの表現へと変化している。Langacker(2007:179)が“*delimitation*”について説明しているところで“.....plural pronouns have the same basic meaning whatever their degree of delimitation with respect to the set of all people. .... With a low degree of delimitation, the plural pronouns are effective impersonal, referring to people as an undifferentiated mass instead of as identified individuals.”と述べており、まさにそのとおりである。

しかし、三人称単数代名詞である“*it*”そして“*she/he*”のミスマッチプロセスは複数人称代名詞のそれとは若干異なるようである。確かに、非人間を指示する“*it*”が人間を指すという点においては指示幅の広がりがあり、非境界制限性という働きをそこに見ることができる。しかし、“*it*”や“*she/he*”のミスマッチは誰までを指示対象に含めるのかという指示幅の異なりだけの問題ではない。何故ならば、「三人称」は基本的に問題となる発話の、話し手でも受け手でもない人および存在を指すのである (Levinson 1983:62)。話し手が自身の指示に、いわば会話における「部外者である他者」<sup>3</sup>を意味する三人称を用いること自体が特別な選択と見るべきだろう。

代名詞以外にも話し手自身を三人称単数表現で表している例があり、その働きは考察の参考になる。三人称単数相当の名詞には、大きく分けて固有名詞と役割名(親族名・役職名等)の二種類がある。

(21)は話し手が自分の固有名詞で自身を指示している例である。このような固有名詞の使用について、Downing (1996:135)は、指示対象についての相互の知識を示し、話し手の権威を表し

<sup>3</sup>今井(1995:160)は次のように述べている。「…これは古風なあるいは大仰な言いまわしが多少なりともユーモラスに響くからである。アメリカのスポーツクラブ会長夫妻と筆者夫妻が会食をしていた際、ウェイターが筆者の注文した飲物を間違って会長のところへ持ってきた。会長は筆者の方に目をやって No, no. Give it to His Majesty. (いや、それは陛下のだ)とウェイターに命じた。That gentleman (あちらのかた)と言うほど堅苦しい付き合いはないが、himでは礼を失うるのでとっさに使ったわけだろう(「年上の婦人の前でその人について she を使った叙述を行うのは失礼である」ということがよく言われるが、実は男女・年齢差を問わず、発言の最初にでてくる場合、その場にいる人について人称代名詞を使うのはよくない。this guy (この男)程度でも he よりはまだしなのである)。ともかくこれをきかっけに会長と筆者は擬古文をまじえるのが習慣となった。」下線は筆者による、つまり会話の相手に対して部外者を意味する“*him*”の使用は失礼となる。

ており、意見の相違が見られる場面に使われると述べている。(21)の例では自分を著名で有能な探偵と自負しているポワロが自分の持つ知識と権威を主張している様子が伝わってくる。

(21) 探偵 Poirot から Joseph 卿へ：Hercule Poirot said: “There is no question of failure. Hercule Poirot does not fail.” Agatha Christie. *The Nemean Lion*. p.20 下線は筆者による

次の(22)では話し手が親族語で自分を指示している。親族名について、Levinson (1983:72)は、多くの言語で子供の前では母親が父親を呼ぶ場合に子供の視点を取ることがあると述べている。そして(23)は役職を表す例である。

(22) 子供が両親の寝室に朝来て父親に：Can we have breakfast? Schegloff (1996:443)

それに対して父親の発話：Leave Daddy alone, he wants to sleep. 下線は筆者による

(23) This reviewer was unable to strictly follow the logic of the submission. Collins and Postal (2012:2)

このような三人称単数名詞用法の効果について Schegloff (1996:447)は、指示する人の持つ公的性質そしてその公的性質が会話において関連性を持っていることを表に出さず伝えていると述べている。(22)/(23)からは話し手個人の顔というより、父親そして査読者の立場が伝わってくる。Marmaridou (2000:110)は、三人称が話し手または聞き手を指示する場合には両者間のある種の社会的距離、権力、権威のみならず連帯・愛情等の心的態度の表現が可能とも述べている。

では、このような多様な効果を三人称単数表現はどうして生み出すことができるのだろうか。それは三人称の「話し手でも受け手でもない人および存在」を指示するという基本的な意味によると考えられる。指示対象を客観的な他者と捉えることにより、その対象のもつ権威や公的な立場等が浮き彫りになるのだろう。

では、話し手は自身を三人称で呼称することによりどのように自身を捉えているのだろうか。Bennett (2014:34)は、話し手が自己を三人称で指示することによって、より客体的な位置づけを示していると述べている。この客体的な位置づけとは Langacker (1985:127)が「自身をあたかも他の個人であるかのように特徴づけている」と述べていることと同じである。つまり話し手は自己を二分しているのである。一人の話し手は舞台上の登場人物であり観察客体ではあるが、それを観客席でもう一人の自分が観察主体として見ているという構図<sup>4</sup>である。

“it”や “she/he”は代名詞のため、それ自体に権威や役割の意味は全く無い。しかし、その分、三人称である意味、話し手が自身を他者として観察者の立場で捉えている意味合いが強いと考えられる<sup>5</sup>。加えて、先ほどの “It’s me.” そして “This is she.” に共通しているのは、相手と対面しておらず、アイデンティティを確認していない不定の状況である (Levinson 1983:71-72)。

<sup>4</sup> 「観察客体」と「観察主体」の区別については3.3節で説明する。

<sup>5</sup> ことわざには “he”は主語として頻繁に使われている。人の振る舞いを観察者の立場で捉えている例と考えられるのではないだろうか。

(1) He fells two dogs with one stone. (2) He knows how many beans make five. 奥津(2000:161/209/130)

本来は定指示という性質を持つ “it” が人間指示用法においては、未だ話し相手として「定められていない何者か」である不定対象を指示していることになる<sup>6</sup>。

下記表 1 は本節の分析結果である。

表 1 外部照応 “it”

①広指示定性・②非直示性 (非境界制限性・不明瞭性)	③非人間性
有標用法： 人間指示・文法的形式と指示的価値のミスマッチ	
(a) 話し手は他者としての自身を観察者の立場で捉えている。	
(b) 不定として対象を指示する。	

## 2.2. 内部照応 “it”

本節では、内部照応 “it” の指示にも①広指示定性・②非直示性(非境界制限性・不明瞭性)そして③非人間性という基本的性質があり、加えてトピック性が観察されることを述べる。人間指示用法においては対象者個々の特定性を低める効果があることを説明する。

最初に、広指示定性がもたらす指示の不明瞭例である。Wales (1996:49)は “it” が前出の名詞句または命題全体、さらにはその背景をも指示できることを(24)の例文で示している。“it” の解釈は全体的 (AがBと別れダブリンに行くこと) にも局所的 (ダブリン) にも可能であり、不明瞭である<sup>7</sup>。

(24) A: Frank, I'm leaving you. I'm going to Dublin.

Wales (1996:49)

B: Why? What is it?

A/B・下線の付加は筆者による

A: It's that big city in Ireland' (Capital Radio, 1992)

次に、非直示性を示すデータとして、Thavenius (1983)がある。Thavenius (1983)は、三人称代名詞(he, she, they, it)を研究対象としており、その研究には “it” の使用頻度を示す統計的データが含まれている。The London-Lunch Corpus から選択された8つの会話がそのデータベースであり(p.50)、“referential”用法の外部照応と内部照応の “it” が含まれている。Thavenius (1983:75-76)は先行研究及び自分の研究から、“this”は “own-reference”を、“that”は “other-reference”を好み、その傾向がテキスト内容の違いを反映してデータに現れていると説明している。一方、“it”の頻度は全てのテキストでほぼ同じである。このことから、“it”は “own/other-reference”の違いにさほど影響を受けない中立的かつ指示幅の広い指示代名詞ということがわかる。

自己/他者指示の違いを示さない非直示性は話し手と聞き手間の共有性と結びつき易く、そこ

<sup>6</sup> Wales (1980:95)は、本来は不定である “one” が特定人物を指す二つの用法を挙げている。一つは話し手を含む総称表現であり、二つ目は上流階級の会話に見られる “T”の代わりに用いられる話し手指示用法である。

<sup>7</sup> Langacker (2007:180)も指示の不明瞭例を挙げている。十代の少女がボーイフレンドと映画に行くことを許してもらえなかった場合の不平である “It's just not fair.” の “it” は何を指すか不明瞭であると述べている。親の決定になのか、土曜日の夜に自宅で過ごしなくてはいけないことになのか、自分で決定できない状態になのか、何に不平を言っているのか不明瞭である。つまり局所的事態に不平を言っているのか全体的状況に不平を言っているのかはっきりしない。



から発話における共有のトピックを“*it*”が指示するという傾向がでてくる<sup>8</sup>。“*it*”について、Gundel, Hedberg, and Zacharski (1993:279-280)は、指示物は短期記憶にあるのみならず、現在の“*attention*”の中心にあると述べている。焦点化されているものは一般に少なくとも先行する発話の話題を含み、それと同時に後続する発話の話題であり続けるものを含むと説明している。つまり、話し手と聞き手が共有している談話のトピック相当を“*it*”が指示する可能性が高いということになる。

上述の広指示定性そして非直示性の例の全てが非人間を指示しており、内部照応“*it*”においても非人間指示が無標であることがわかる。

しかし、人間を指示する有標用法は内部照応“*it*”にも見られる。Wales (1996:161-162)による“*collectives*”集合体を“*it*”で指示するか“*they*”で指示するかという選択である。“*it*”か“*they*”か、その選択は当該の指示物に対する話し手の視点によるものであり、集合体を“*the group as an entity*”と見る場合、つまり、個々の人の特定性を低め“*faceless*”の集合として捉えた場合は“*it*”であり(25)、逆に人に焦点を当てて“*the group as composed of several individuals*”と見る場合には“*they*”となる(26)、と説明している。つまり、この場合の“*it*”は非人間性というより個々の人の特定性を低める“*defocusing*”の働きへと変化していると考えられる。

(25) The Government must act. It must make up its mind about priorities... It must insist that local authorities reserve subsidized accommodation. (SEU, W-15-01; journal, 1964) Wales (1996:164)

(26) The Government are prone to spring decisions on delegates: they announced the 70 mph limit to a delegation of chief constables (SEU, W-08-01; journal, 1966) Wales (1996:162) 下線は筆者による

次の表2は本節の分析結果である。

<sup>8</sup> Langacker (2007:177)は、内部照応“*it*”はコンテクストにおける高度な際立ち(*contextual salience*)を要求する(Ariel 1988による“*accessibility*”そしてGundel, Hedberg, and Zacharski 1993の“*givenness*”)と指摘しており、トピック性と整合すると考える。

表 2. 内部照応 “it”

①広指示定性・②非直示性 (非境界制限性・不明瞭性・トピック性)	③非人間性
有標用法：人間指示 (c) 集合体の個々の人間の特定性を低める “defocusing”の働きを持つ。	

### 2.3. Impersonal *it* 構文の話し手と捉え方

本節では Impersonal *it* 構文の話し手と事態の捉え方を考察する。前者については外部/内部照応 “it”の有標用法である人間指示に見る特徴が Impersonal *it* 構文の話し手に受け継がれており、「顔の見えない観察者」と考えられることを述べる。後者については Impersonal *it* 構文に特徴的な述語の振る舞いから、事態の非能動的捉え方を抽出する。

第一の問題である Impersonal *it* 構文の話し手は、その姿を直接見るができない。その見ることができない姿を浮き彫りにするためには Langacker (1985/1990/1996/2002/2006)による「主體的」そして「客體的」の区別が有意義と思われる。

Langacker は、視覚状況における観察者(observer)とその視覚対象物(the entity that is observed)という非対称性に基づく “subjective” (主體的)と “objective” (客體的) 解釈の区別を説明している。この区別は舞台と観客席というメタファーでも表されている。舞台を見ている観客が舞台観察に熱中して自己意識を持たないことがあるように、視覚対象物である “onstage”にある客体 (conceptualized) を知覚している視覚者/概念化者(viewer/conceptualizer)は自身の存在を概念の客体として捉えていない。このような場合の viewer/conceptualizer は概念主体としての働きしかないことから「主體的」な存在であり、viewer/conceptualizer は主體的に解釈される。一方、舞台の上の実体は概念化の客体物として「客體的」な存在であり、客體的に解釈される。

では Impersonal *it* 構文の話し手は舞台上にいる「観察客体」なのか、それとも客席で見ている「観察主体」のいずれであろうか。その答えは指示的 “it”の意味にあるのではと考える。何故ならば、Langacker (2007:179)は、英語非人称代名詞は人称代名詞と同じ意味を持っていると提案している。従って、Impersonal *it* 構文の話し手の考察において、外部/内部照応 “it”の人間指示用法の特徴を参考にするのは有意義であると考えられる。

#### 外部/内部照応 “it” 人間指示用法の特徴 (表 1・2 より)

- (a) 話し手は他者としての自身を観察者の立場で捉えている。
- (b) 不定として対象を指示する。
- (c) 集合体の個々の人間の特定性を低める “defocusing”の働きを持つ。

(a)の特徴から、観客席に座り観察している話し手が考えられる。自分が舞台上に立つ客体的存在である場合もその姿をもう一人の自分が観客席に座って見ており、自己を二分して話し手は「観察主体性」を保っている。さらに(b)と(c)の特徴から、個々の顔の見える観客としてではなく、顔の見えない大勢の観察者の一人としてふるまっている、とこのような構図が考えられる。

そして内部照応 “it”には共有される話題という特徴もある。そこから顔の見えない大勢の観

察者が集まり、彼らの観察結果が共有されより抽象化されて「一般化された概念」が生み出される。Impersonal *it* 構文が表す事態の概念化者は話し手自身または特定可能な個人なのかもしれない、しかし、このような背景から、「一般化された概念化者」として示される傾向が生まれるのではないかと、そして話し手は「一般化された概念化者」として自身を示したいのではと推測する。

次にその「一般化された概念化者」はどのような舞台を好み、どのように舞台を捉えているのだろうか。Impersonal *it* 構文の事態の捉え方が第二の問題である。その答えを Impersonal *it* 構文に特徴的な4つの述語の振る舞いから求めていきたい。

第一そして第二は Langacker (2011:198-203)の “The control cycle” という一般的認知モデル (actorがターゲットをどのように認識し対応するかのモデル)による分析結果からである。“Actor”はターゲットを認識した後 “Potential” と呼ばれる段階(Formulation / Assessment / Inclination)で処理方法を検討し、次に “Action” 段階でその処理を行い、その結果が “Result” へという一連の流れである。そしてこの認知モデルの、どの部分が人主語文または Impersonal *it* 構文で表現可能かを説明している。

第一に、Langacker(2011:201-202)は、Assessment の一部の行為と Action (learn /decide /discover)は人主語を要求すると述べている。Impersonal *it* 構文の中では“action”を能動態で表すことはできない(27b)。表すためには受動態が要求される(28)。しかし、その場合でも “actor”を Impersonal *it* 構文の中では表すことはできない(30)。これらの現象は Impersonal *it* 構文は明示的行為者による行為を表すのには適さないことを示している。

(27) **Action**

- (a) Albert {learned / decided / discovered} that aliens had stolen his shoes. Langacker (2011:202)
- (b) \*It {learned / decided / discovered} that aliens had stolen Albert's shoes. ibid.

(28) It has been ordered that all prisoners should be shot at dawn. Dixon (2005:368)

(29) The firing squad has been ordered that all prisoners should be shot at dawn. ibid.

(30) \*It has been ordered the firing squad that all prisoners should be shot at dawn. ibid.

下線は筆者による

第二に、Langacker(2011:201-202)は、Formulation (be possible /conceivable /plausible /feasible /imaginable)を表す述語は、人主語は用いられず(31a)常に Impersonal *it* 文が用いられる(31b)、と述べている。“possible”等の形容詞は認識的判断を表すものであり、その形容詞が修飾する意味内容は事実であると前提されていない(nonfactive)ことを示す非叙実形容詞である。

(31) **Formulation**

- (a) \*We are {possible / conceivable / plausible / feasible / imaginable} that they could be of some use to us. Langacker (2011:202)

- (b) It is {possible / conceivable / plausible / feasible / imaginable} that they could be of some use to us. Langacker (2011:200)

この「非叙実」(nonfactive)という性質は Impersonal *it* 構文の他の現象にも見ることができる。Huddleston & Pullum (2002:1406-1407)は、*that* 節を主語とする通常文では不可(32)で Impersonal *it* 構文にのみ可能(33)な動詞として(34)を挙げている<sup>9</sup>。“strike”のみ他動詞で他は自動詞である。

- (32) \*That he was dying turned out. Huddleston and Pullum (2002:1406)  
 (33) It turned out that he was dying. ibid.  
 (34) appear, be, chance, come about, fall out, happen, seem, strike, transpire, turn out  
 Huddleston and Pullum (2002:1407)

これらの動詞のいくつかは Kiparsky and Kiparsky (1971)が非叙実動詞(nonfactive)として挙げている動詞と重なる。Kiparsky and Kiparsky (1971:346)は、叙実動詞(factive)の場合には外置はオプション(35/36)であるが、非叙実動詞では義務的(obligatory)(37/38)であると述べている。

- (35) 叙実動詞 That there are porcupines in our basement makes sense to me. Kiparsky and Kiparsky (1971:346)  
 (36) 叙実動詞 It makes sense to me that there are porcupines in our basement. ibid.  
 (37) 非叙実動詞 \*That here are porcupines in our basement seems to me. ibid.  
 (38) 非叙実動詞 It seems to me that there are porcupines in our basement. ibid.

第三の特徴は Huddleston and Pullum (2002:1406)が示している“be”動詞に関する興味深い事象に現れている。それは外置に課せられる統語的制約として紹介されており、母文の動詞 “be”が “specifying sense”、特定するという意味で用いられる場合には “basic version”つまり通常文体(39)が要求される。

- (39) How she escaped is the question we ought to be addressing. Huddleston and Pullum (2002:1406)  
 (40) \*It's the question we ought to be addressing how she escaped. ibid.

しかし、「特定する」という意味ではなく、「説明する」場面では “be”動詞は Impersonal *it* 構文に生起可能なようである。Huddleston and Pullum (2002:962)は “more or less idiomatic uses of *be with it as subject*”として下記の例文を挙げている。

<sup>9</sup> 但し、“appear, seem, strike”は叙述補語(a predicative complement)を持つ場合は *that* 節主語が可能である(Huddleston & Pullum (2002:960/1407)。叙述補語を持つ場合「キムが病気であること」は何らかの前提事項として提示されているからと考えられる。

・ That Kim is ill seems obvious / strikes me as obvious. Huddleston and Pullum (2002:1407)

- (41) It's not that I don't understand what you're trying to say. Huddleston and Pullum (2002:962)  
 (42) It's just that there hasn't been time to consider the matter carefully. ibid.  
 (43) It may be that we should have given him a second chance. ibid.

そして次のように説明している。まず、“it”が例えば“my objection”や“the best suggestion”などを前方照応しているというケースは除外する。次に、際立った解釈 (the salient interpretation) において、“it”は明白な指示対象は持ってはおらず、従って内容節によって特定化される値(value)を限定する変数(variable)と見なすことはできない。(41)は“not”と義務的な“that”を伴い、内容節が表している命題を否定する“an idiomatic way”である。(42)は義務的な“that”を伴い、“I might have been showing reluctance to accept some proposal and say (42) to explain why.”と説明を提供する方法である。(43)は“may”そしてストレスが置かれる“be”そしてオプションである“that”を持っており、“Maybe/Perhaps we should have given him a second chance.”という意味と等価である。

とするならば、SVC 文(44)と Impersonal *it* 構文(45)は完全には等価ではないことが考えられる。Impersonal *it* 構文(45)の“to teach her”は“a pleasure”を特定しているというより「教えること」を「喜びである」と説明している色合いが強いと考えられる。

- (44) To teach her is a pleasure.  
 (45) It is a pleasure to teach her.

この見方は Impersonal *it* 構文の情報構造からも妥当と考えられる。Huddleston and Pullum (2002:1404)は“Non-extraposed content clause treated as background knowledge”、非外置内容節は背景知識であると説明している。ということは、(45)の“to teach her”は既知情報であり話し手がそのことについて新情報“a pleasure”を示し、説明していることになる。

第四の特徴も、Huddleston and Pullum (2002:961)からの事例に基づく。(46)の非叙実文と(47)の叙実文を組み合わせた(48)は非文である。Impersonal *it* 構文は事態を動画のように連続的に示しその変化を表すことはしない、その代わりに、静止画のようにその時々「らしい」または「であった」という表現のみが可能ということになる。

- (46) It seemed that he was trying to hide his true identity. Huddleston and Pullum (2002:961)  
 (47) It was later confirmed that he was trying to hide his true identity. ibid.  
 (48) \*It seemed and was later confirmed that he was trying to hide his true identity. ibid.

以上述べた Impersonal *it* 構文に特徴的な述語の観察は次の4点を示している。第一には行為的動詞は能動態では適合せず、受動態の場合でも行為者を明記できないこと。第二は非叙実述語が適していること。第三は、“be”の分析及び内容節は背景的知識を表すという情報構造から、

Impersonal *it* 構文には事態を特定するというより説明するという働きが見られること。これは話し手の解説行為とも解釈できる。第四に、非叙実動詞と叙実動詞の組み合わせが Impersonal *it* 構文には不適切なことから、Impersonal *it* 構文は事態を流れのある動画としては捉えず、一コマの静止画のように捉えていると考えられる。

本節の分析は次のことを示している。Impersonal *it* 構文の話し手の特徴には指示的“*it*”の有標人間指示用法の性質が受け継がれている。そして Impersonal *it* 構文は事態を非能動的に捉えることを好むと考えられ、その捉え方の枠組みが“*it*”の非境界制限性と不明瞭性からもたらされる“abstract setting”であろう。下記表 3 は本節の分析結果である。

表 3. Impersonal *it* 構文

<i>It</i>	非境界制限性・不明瞭性→Scope of awareness・Abstract setting Langacker(2007:180)	
話し手	観察主体・顔の見えない大勢の観察者の一人 → 集合 ＝一般化された概念化者 Langacker (2011:207) 背景知識を表す導入内容節 → 事態の説明	
特徴的な 事態表出	Impersonal <i>it</i> 構文に不適合：行為表現・行為者表現 Impersonal <i>it</i> 構文にのみ可能：非叙実形容詞・動詞 一コマの静止画様態としての提示	事態の捉え方 非能動的

### 3. Existential *there* 構文

Langacker (1991: 8.1.3.4 pp.351-355) は “Abstract settings” というタイトルで フランス語と英語の “setting-subject constructions” について議論している。その中で、*There* 構文について、“Suddenly there was a loud commotion.” を “\*Suddenly a loud commotion was.” とすることができないことから、*there* 構文は “there-less” 基底構造から “There-Insertion” 規則によってできたものではないことを主張している(p.352) <sup>10</sup>。

そしてその機能について “*There* designates an abstract setting construed as hosting some relationship.” と述べている(p.352)。この考え方は Lakoff(1993:671-673)<sup>11</sup>そして Bolinger (1977:93)

<sup>10</sup> 高見・久野(2002:50)：生成文法では、*there* 構文の *there* は、意味内容を持たず、拡大投射原理を形式上満たすために主語位置に置かれる、「虚辞」であると考えられている。しかし Kuno(1972)では、*there* 構文の *there* は意味を伴わない虚辞ではなく、後置された場所を表す副詞句の「代副詞」として分析されている。つまり、*there* は具体的な場所句を導入する要素として分析されている。また Bolinger (1977:91)は、*there* 構文の *there* が、場所を表す副詞の *there* の拡張であり、「一般化された場所」(generalized location)を表すと主張し、Langacker (1991:352)は、「抽象的场所」(abstract setting)(または特定化されない場所(unspecified setting))を表すと主張している。このような考えは、*there* 構文が、これまで考察した多くの例で場所を表す句を伴っているという事実から正しいと思われる。

<sup>11</sup> Lakoff(1993:671-673)：ボリンジャーは存在の “*there*”は意味をもっていて、「何かを意識に持ち込む」(“bring something into awareness”)機能を果たす、と主張している。ボリンジャー(1977, pp.93-94)は「何かを文字通りあるいは比喩的にわれわれの面前に持ち出す」空間的场所格を「何かをわれわれの心に提示する」存在の *there* と対比している。ボリンジャーの示唆するところでは、*there* は「意識の中へ持ち込む」の「意識」を提示し、意識は「抽象的场所」である。ボリンジャーは、われわれと同じく、直示的场所格は現前—空間、われわれの知覚、談話、生き生きした想像、などの中での現前—に関わる、と述べている。…… われわれが行うことになる提案はボリンジャーの示唆したことと主旨が非常に近い。われわれは漠然とした「意識」という用語に代えて、フオコニエ(Fauconnier 1985)で提案されたメンタル・スペース(mental space)という概念を用いる。メンタル・スペースとは、その中に思考が生じたり、概念的なものが位置づけられたりする媒体のことである。…… 存在の *there* はその中に概念的な実体が位置づけられるメンタル・スペースを提示する、という考え方を提案する。

を受けてのものであり、一種の抽象的場面設定(*abstract setting*)であり、提示的機能を持っていると分析している。

Still, he(=Bolinger) is certainly correct that a *there*-clause brings an element into awareness and thus serves a presentational function. Langacker (1991 Vol II: 353) <sup>12</sup>

I would also analyze the “dummy” or “existential” *there* as a kind of abstract setting.

(21) a. *There was an eagle on the roof.*

b. \**An eagle was been on the roof by there.*

These sentences do not profile participant interactions. Because they first evoke the global setting, and then zoom into focus on a specific element, they are better described as having a “framing” or “presentative” function. Langacker (2000:43)

本節では Langacker の提言をもとに、所格/直示的 “*there*”の基本的そして周辺の性質から存在的 *there* 構文の話し手そして事態の捉え方を求めていく。

### 3.1. 所格 “*there*”

本節では所格 “*there*”の基本的性質は①指示定性、②直示性、③場所性であること、そして有標である非場所指示用法には事柄や認識の一部を「静止画」のように提示する特徴があることを述べる。

所格 “*there*”の第一の性質は外部照応 “*it*”と同様に指示に定性を持っていることであるが、“*it*”とは異なり場所に限定されている(11)。しかし、その場所の大小についての制限はなく(49)、その点において非境界制限性を示している。

(11) Don’t leave your shoes there. = on the table (\*on January 7)

(49) I really had a wonderful time there. = at my grandmother’s home, in Hawaii, in the U.S.A. etc.

所格 “*there*”が外部照応 “*it*”と異なる第二の性質は直示性である。この直示性には3つの局面が見られる。

その第一の局面は “*there*”が必然的に直示の中心を持っていることである。多くの場合、視点は話し手に置かれることから (Kuno and Kaburaki 1977)、(11) “Don’t leave your shoes there.”の “*there*”の直示の中心は話し手という解釈が無標であり、話し手から見た場所が “*there*”ということになる。この構図を参照点構造で言い換えると、参照点が話し手、ターゲットは “*there*”が指示する場所となる。

そしてその話し手と向き合う「聞き手」の存在の含意が直示性の第二の局面である。直示表現がスピーチイベントと密接な関係にあることから聞き手の存在を考えるのは妥当なことであ

…… 存在直示構文は次のメタファーに基づいている。存在は概念空間内の場所として理解される。

<sup>12</sup> Langacker (1991 Vol II: 353)のこの意見は、*there* はダミー主語ではなく、“*abstract setting*”と主張したのは Lakoff 及び Bolinger が先達であるとしたうえで、Bolinger の意見の全てを認めているのではないが、と述べた上での主張。

ると考える。そして、直示性の第三の局面は距離に関するものである。“There”は話し手にとりその場所が「遠い」ことを示し、それは“here”との対比を想起させる。

参照点構造の明確な “there”ではあるが、その指示には不明瞭が見られる場合がある。Talmy (2017:5-6) は(50)の例文を次のように説明している。ジェスチャーを伴う “there” はターゲットが「遠」でかつ「場所」であることは指示するが、それは明確さを持つ指示ではなく、単に話し手の指先からターゲットの場所までのどこかを指しているに過ぎず、その領域特定は聞き手の想像に任されている、とのことである。

(50) You can put your glass down right !-there. Talmy (2017:5/277)  
 (話し手は自身の側に立っている客に向かってこの発話を行い、向かいのテーブルの角に向けて指さしをしている。“!” はそのことばに強いストレスが置かれていることを示している。)

本来は場所を指示する所格 “there”がその指示領域を場所以外に広げる用法もある。下記(51)の “there”は辞書、例えば『新英和大辞典』が「a (談話・事件・動作などの進行中)そこで[に] (at that point)」、(52)の “there”は「その点で (in that respect)」と説明している使い方である。

(51) A: I am always complaining that there is never enough time to do everything I want, but thinking about it, time is the only real invariable constant in my life. But, having said that, I suppose that time is also the only thing in my life that I can count on to change.

B: Whoa, hang on there a moment. You're making my head spin. What on earth are you trying to say? Belton (2012:54)下線は筆者による

(52) A: It sometimes amazes me the amount of money that is wasted in space development when the returns are non-existent. Haven't we got enough problems to clear up on earth without throwing money out of the window?

B: I think you are wrong there. It may take a little time, but space development is the answer to many of our problems. .... Belton (2012:132)下線は筆者による

各々の“there”が指示しているのは、事柄の進行におけるある一時点または認識のある一部分であり、それを静止画のように切り取り提示している。この非場所指示は “there”の持つ非境界領域性による広がりとも、または時間や認識を空間と捉えたメタファーとも考えらえる。

下記表 4 は本節の分析結果である。

表 4 所格 “there”

①指示定性・②直示性 (弱非境界領域性・不明瞭性)	③場所性 (遠)
所格 “there” 場所指示 (a) 参照点構造：参照点/直示の中心＝話し手 ターゲット/指示物＝“there”の指示する場所＝遠 (here との対比・非制限領域)	



- (b) 聞き手=存在の含意  
非場所指示  
(c) 進行中の談話・事件・動作などの一時点または認識における一観点を切り取り静止画  
様態で示す。

### 3.2. 直示的 “there”

本節では直示的 “there” は所格 “there” の性質を受け継ぎながらも、動詞、参照点構造、聞き手、指示領域の4点で違いがあることを述べる。

レイコフ(1993:事例研究3 There 構文)は、(12)の文頭の “there” は主語性テストからも、そして「場所を選びだしているなので、場所副詞であり、また、選び出す場所が話者から見てのものであるから、直示的である。」(レイコフ 1993:580)と言っている。

(12) There’s Harry with his red hat on.

レイコフ(1993:580)

この直示的 “there” は4つの点で所格 “there” と異なる。第一は、“be”動詞のみならず出現動詞も生起することである(53)。この点は出現動詞が多く生起する提示的 *there* 構文<sup>13</sup>に繋がると思われる(54)。

(53) 直示的 “there” : There goes Harry!

レイコフ(1993:587)下線は筆者による

(54) 提示的 *there* 構文 : After they had travelled for many weeks, there came a moonlit night when the air was still and cool.

Huddleston and Pullum (eds.) (2002:1402)下線は筆者による

第二が参照点構造におけるターゲットである。直示的 “there” のターゲットは場所自体ではなく、場所にいる実体である赤い帽子をかぶったハリー(12)であり、その場所に出現するハリー(53)である。指示焦点がシフトしている。

第三に聞き手の存在である。レイコフ(1993:585)は、所格 “there” と直示的 “there” は等価ではないと説明している。例えば、下記の直示的 “here”(55)では話し手は聞き手の注意を “here” で指定される場所へ向けようとしていると説明している。伊藤(2005:92)も直示的 “there” について「この構文における *there* は、話し手と聞き手との相対的な場所 (location) を取り立てる役割を担っている。」と説明しており、聞き手の存在に意味がある。

(55) 直示的 “here” : Here comes Harry.

レイコフ(1993:585)

従って、聞き手の存在は直示的 “there” においては含意ではなく前提であり、話し手は聞き手に

<sup>13</sup> Huddleston and Pullum (eds.)(2002:1390)は *There* 構文を動詞の種類によって2つに分けている。一つは *be* 動詞が用いられる “existentials” (存在)、もう一つは *be* 動詞以外が使われ “presentatinals” (提示) と呼ばれている。提示的 *there* 構文に生起する動詞として、“appear, arise, arrive, develop, emerge, enter, escape, follow, grow, lie, live, loom, occur, persist, sit, spring up, sprout, stand” が挙げられており、それらの多くは “being in a position, coming into view” の意味を表すと言われている (Huddleston and Pullum (eds.) 2002:1402)。

向かって強勢が置かれた “there” が指示する場所に注意を促すという積極的な立場にあることになる。この点を、レイコフ(1993:587)は、発話内の力 (illocutionary force) と結びつけている。

第五は場所についてである。「直示の there には指し示すジェスチャーが伴うこともある」とレイコフは述べている。ジェスチャーが可能で聞き手への注意喚起という機能を考えると、直示的 “there” では領域がかなり狭く制限される可能性がある。さらに、このことは直示的 “there” の指示の非境界制限性または不明瞭性が薄いことも示している。

下記表 5 は本節の分析結果である。

表 5 直示的 “there”

①指示定性・②直示性	①場所性 (遠)
直示的 “there”	
(d) 参照点構造: 参照点/直示の中心=話し手 ターゲット/指示物=“there”の指示する場所に存在/出現する実体=遠 (here との対比・ジェスチャーが可能で制限領域)	
(e) 聞き手=存在の前提・聞き手の注意喚起	

### 3.3. 存在的 there 構文の話し手と捉え方

本節では存在的 *there* 構文について次の3点を説明する：①参照点構造におけるターゲットの指示焦点にシフトが見られ、そのシフトが “abstract setting” の構築を動機付けている可能性があること。②「場所」を通して事態を捉えていること。③特定の顔を持つ観察者としての話し手を持っていること。

(8) 存在的 *there* 構文：There was a man shot last night.

レイコフ(1993:580)

第一に、存在的 *there* 構文(8)の参照点構造を考える。所格 “there” の参照点構造では、参照点は話し手であり、ターゲットは “there” で指示された場所である。しかし、直示的 “there” においては、参照点は同じであるが、ターゲットは場所に存在または出現する実体であり、場所自体は背景化している。存在的 *there* 構文の参照点構造においては指示焦点がさらにシフトしている。“there” は具体的な場所をもはや指示していない。実体の存在場所は、場所句 (56) “on my desk”、(57) “in the hall opposite in the front door” で表されている。存在的 *there* 構文の “there” の場所指示は背景化がさらに進み、探索領域を示す場面的枠組みへと変化していると考えられる。

(56) There are two copies of Sue’s thesis on my desk.

Huddleston and Pullum (eds.)(2002:1397)

(57) There stood an old grandfather clock in the hall opposite in the front door.

高見・久野(2002:35)

下線は筆者による

ではこの場面的枠組みの参照点はどこにあるのだろうか。それは叙述内容により、話し手または事態の参与者である。そして次の(58)から(61)の例は、話し手から事態参与者への参照点の変化、言い換えると話し手の客体的存在から主体的存在への変化が連続体であることを示して

いるのではないだろうか。

まず、次の(58/59)は Langacker (1985:13)が “perceptual experience”と説明している話し手自身の知覚体験の描写である。話し手が自分の目で見ている雪をその時点でその場にて描写していることから、話し手自身が直示の中心で参照点となり、雪は実際に話し手の周囲にある。話し手は舞台上にいる役者、観察客体でありかつそれを見ている観客、観察主体でもある。

但し、“me”が付加されていない(58)は観察客体と観察主体の一体性が高く、話し手の客体性は高い。一方、“me”が加わっている(59)は話し手の観察主体としての度合いが強いという違いがある。

(58) There is snow all around. Langacker (1985:138/139)

(山にスキーに来た旅行客が山頂で友人に絵葉書を書く)

(59) There is snow all around me. ibid.

(宇宙飛行士が惑星に着陸し宇宙船の周囲を探索しヒューストンにそれを冷静に報告—)  
(58)に比べより客体的で形式的表現)

(60/61)は話し手の知覚体験ではなく、小説の冒頭部分である。(60)は著者が参与者 Dmitri の視点でナレーションを行っており、Dmitri は目前に空間が広がっているのを知っている。直示の中心そして参照点は事態参与者である Dmitri であるが、著者の視点が Dmitri におかれていることから著者との一体感も表現されている。(61)も Dmitri が直示の中心そして参照点である。しかし “of him”が付加されていることから、著者にとり Dmitri が観察客体であり著者は風景全体を客体的に見ていることを伝えている、という違いがある。

(60) Dmitri was trudging through the woods. There was a clearing ahead. Langacker (1985:140)

(61) Dmitri was trudging through the woods. There was a clearing ahead of him. ibid.

(58～61)の中で、(61)における話し手はストーリーテラーの役割が最も強く、観察主体性が一番高い。そして(61)では事態参与者である Dmitri の参照点としての働きが明らかである。

所格そして直示的 “there”においては、話し手自身が参照点であることから、話し手は舞台上の観察客体としての役割も少なからず果たしている。しかし存在的 *there* 構文の場合は、上述のように話し手が参照点とはならず、“there”が示す探索領域の中の実体を客席で観察している観察主体である場合もある。

さて、所格、直示的 “there”そして存在的 *there* 構文の参照点構造におけるこの一連の指示焦点のシフトをどのように捉えるべきだろうか。Langacker は Impersonal *it* の動機付けについては指示的 “it”の持つ非境界制限性と不明瞭性が最大限に発揮され、広がった領域であると説明している。しかし “there”の持つ非境界制限性と不明瞭性は “it”よりはるかに弱く、同等の動機付けは難しいと思われる。この一連の指示焦点のシフトが指示的 “there”を “abstract setting”へと拡

張させている動機づけではないだろうか。

第二に、事態の捉え方を考える。「場所」が探索領域であることから、そこで示される実体も「場所にある」として静止的・非活動的に示されている。それは次の2つの特徴的現象に見ることができる。

一つ目は、導入実体を修飾できる形容詞のタイプである。中島(編)(2001:89-90)は「存在文の主語 NP の後ろに述語が生じる場合、その述語は変化し得る状態(state)を表すものに限られる。恒常的な特性(property)を表す述語は生じることができない。」と述べている。生起可能な状態の形容詞として“alert, available, clothed, closed, drunk, hungry, missing, naked, open, present, sick, sober, stoned, tired, undressed, ...”、そして生起できない特性の形容詞として“beautiful, boring, crazy, intelligent, smart, tall, witty...”が挙げられている(p.90)。

(62) There is a man sick / \*tall.

富澤(2002:86)下線は筆者による

(63) There were three kids naked / \*intelligent.

ibid.

(62)は一時的状態を表す「ステージレベル」の述語は適正だが、(63)の恒常的特性を表す「個体レベル」の述語の生起は非文となることを示している。つまり、存在的 *there* 構文には、導入実体の一時的な状態を切り取り静止画のように描写するという現象があることを示している。この一時的静止画のような切り取り方には、所格“*there*”の非場所指示との類似が見て取れる。所格“*there*”非場所指示は流れがある事態における一時点・一観点を静止画的に指示している。

二つ目は、存在的 *there* 構文に導入可能な実体自体であり、そこに「ある的」特徴を見ることができる。Huddleston and Pullum (eds.)(2002:1397)によると、(64ab-72ab)の例文が示すように、空間における具象的実体の場合は非存在文と存在 *there* 構文共に、適切であるが、空間そして時間における抽象的実体の場合は存在 *there* 構文が適切とのことである。つまり、存在的 *there* 構文は事柄の実際の展開を超越したスキーマ性の高い抽象的実体の導入が可能である。

表6 Huddleston and Pullum (eds.)(2002:1397)

	非存在文		存在的 <i>there</i> 構文
(64a)	空間における具象的な実体 A furniture van was in the drive.	(64b)	There was a furniture van in the drive.
(65a)	Two copies of Sue's thesis are on my desk.	(65b)	There are two copies of Sue's thesis on my desk.
(66a)	空間における抽象的実体 #Plenty of room is on the top shelf.	(66b)	There's plenty of room on the top shelf.
(67a)	#A hole is in my jacket.	(67b)	There's a hole in my jacket.
(68a)	#Sincerity was in her voice.	(68b)	There was sincerity in her voice.
(69a)	#Peace was in the region.	(69b)	There was peace in the region.
(70a)	#An accident was in the studio.	(79b)	There was an accident in the studio.
(71a)	時間における実体 One performance is at noon.	(71b)	There's one performance at noon.
(72a)	#A fireworks display is tonight.	(72b)	There's a fireworks display tonight.

このような静止的・非活動的<sup>14</sup>という見方は Langacker (1991: 8.1.3.4 p.351)の *there* 構文は “imperfective process”を表すという意見と矛盾するものではないと考える。

*There* designates an abstract setting construed as hosting some relationship. This is put in correspondence with the relationship profiled by *be*, namely the continuation through time of a stable situation (characterized only schematically). The composite structure *there be* is an imperfective process equivalent to *be* apart from the (by now familiar) shift in focus that results from trajector status being conferred on the setting.

Langacker (1991: 352)

第三に観察主体としての話し手の姿を考えるにあたり、この話し手が積極的な解説行為を行っているという点が大きなヒントになる。少なくとも次の3種の解説行為が見られる。

その解説行為の一つは、上述した存在的 *there* 構文の抽象的実体の導入という現象である。この現象は話し手が具体的な事態を抽象化し概念化解説を行っていると見ることができるだろう。

二つ目の解説行為は、話し手の命題内容についての判断態度表出である。それは態度離接詞 (attitudinal disjuncts)である副詞の生起位置の違い (存在的 *there* 構文内か外) による容認度判断から見ることができる。元々の例文は『英和大辞典』からであり、下線の付加は筆者による。

probably – 事態の真偽に関する認識的態度を表す副詞

(73) ‘Good’ There will probably be more customers when the summer vacation starts.

(74) ‘Not natural’ Probably, there will be more customers when the summer vacation starts.

Fortunately, Interestingly – 事態に対しての心情的評価態度を表す副詞

(75) ‘Not natural’ There will fortunately be more customers when the summer vacation starts.

(76) ‘Good’ Fortunately, there will be more customers when the summer vacation starts.

(77) ‘Not natural’ There will interestingly be more customers when the summer vacation starts.

(78) ‘Good’ Interestingly, there will be more customers when the summer vacation starts.

真偽に関する認識的態度を表す副詞は存在的 *there* 構文内に生起するほうが自然であるが(73)、心情的評価態度を表す副詞は存在的 *there* 構文外が自然である(76/78)。このことから、存在的 *there* 構文の話し手は、心情的評価態度は示さないが、事態の真偽に関する判断を示すことができることがわかる。冷静な観察態度と言えらるだろう。

その三で、かつ最も重要なのは、これらの解説行為を特定の聞き手の状況を踏まえながら行っている点である。それはこの構文の情報構造が明確に伝えている。*There* 構文の導入実体には新情報が好まれることは良く知られているが、存在的 *there* 構文の場合は単に「新しい情報」とどまらず聞き手の現状を踏まえた上での「新しさ」である。存在的 *there* 構文の導入実体は

<sup>14</sup> 「場所」が「場面展開」へと変化している提示的 *there* 構文において、導入可能な動詞は非能格動詞ではなく非対格動詞のみがあらわれるという仮説がある。非対格動詞は「なる的」意味を表すことが多いとも言われている。

“addressee-new information”—例え、談話にはすでに導入されている実体であっても聞き手にとり何らかの意味で新しい実体—であると言われている<sup>15</sup>。つまり、聞き手にリマインダーとして既知実体を示して聞き手の注意を引くことまでも行っている<sup>16</sup>。

所格 “there”そして直示的 “there”へと変化するにつれて、聞き手の姿が濃くなってきているが、存在的 “there”構文では聞き手の存在が重要になっていることがわかる。このように存在的 *there* 構文の話し手は聞き手の細かな状況を判断しながら解説した情報を聞き手に与えている。これは不定の者にはできない行為であり、存在的 *there* 構文の話し手は特定の顔を持つ観察主体であると考えられる。

存在的 *there* 構文は所格/直示的 “there”の性質を受け継ぎながらも、参照点構造に変化が見られ、「場所」を通しての事態の捉え方と特定の顔を持つ観察主体が観察された。次の表7は本節の分析結果である。

表7 存在的 *there* 構文

<i>There</i>	探索領域を示す場面的枠組み → Abstract setting Langacker (1991/2000) 焦点のシフト (場所→場所に存在/出現する実体→場面的枠組み)	
話し手	観察客体/特定の顔を持つ観察主体 聞き手への解説行為：新情報の導入・事態の抽象化/概念化・事態の真偽判断	
特徴的な 事態表出	「場所にある」として表出 一時的静止画様・抽象的実体の導入	Imperfective process Langacker (1991:351) 事態の捉え方 非能動的

#### 4. Impersonal *it* 構文と存在的 *there* 構文の比較

2節そして3節の分析結果に基づき、本節では Impersonal *it* 構文と存在的 *there* 構文の比較を行う。二つの構文に共通する特徴として、①指示的用法からの意味の連続性、②事態の非能動的捉え方を挙げる。そして相違として、③指示スコープ、④話し手、⑤ “abstract setting”の構築の動機づけ、を示す。

Impersonal *it* 構文と存在的 *there* 構文の第一の共通点は、指示的用法からの意味の連続性である。2.3の Impersonal *it* 構文そして3.3の存在的 *there* 構文の考察は、各々が語彙的用法の性質を濃く受けついでいることを示している。語彙と文法は連続体であるという認知文法の主張 (Langacker 2000/2005/2008)に沿う結果であると考えられる。さらに、特筆すべきは、外部/内部照応 “it”の有標用法である人間指示の特徴が Impersonal *it* と重なっていること、さらに所格 “there”の有標非場所指示の特徴も存在的 *there* 構文に見受けられることである。これらのことは語彙から文法の連続体において、家族的類似性による拡張の可能性があることを示している。

二つ目の共通点は二つの構文が好む事態の捉え方である。下記の(79)では Impersonal *it* 構文の内容節として存在的 *there* 構文が生起している。この現象は二つの構文双方に適合する性質がある可能性を示している。それは事態を非能動的に捉え、事態を連続動画のようにではなく事

<sup>15</sup>存在的 *there* 構文の情報構造参照文献：伊藤(2005:108) / Huddleston and Pullum (eds.) (2002:1398) / 久野・高見(2007:292-293) / Birner and Ward (1993)

<sup>16</sup> 提示的 *there* 構文の場合は例え定名詞であっても “discourse-new”、談話に初めて導入される実体ならば導入可能である。

態の一部分を切り取った一枚の静止画のように提示するという捉え方である。さらに、事態の真偽に関する認識的態度を表すことも共通している。

(79) It seems to me that there are porcupines in our basement.

Kiparsky and Kiparsky (1971:346) 下線は筆者による

英語は能動的表現を好むと言われることが多い。池上(1981)の「する英語」は著名であり、Langacker(1991:335)も英語の4構文(自動詞文・他動詞文・中間構文・受動構文)を“Action chain”から分析している。他にも Talmy(1988)による“Force Dynamics”もよく知られており、いずれも英語の持つ能動性/他動性に焦点を当てている。とするならば、Impersonal *it* 構文そして存在的 *there* 構文の事態の非能動的捉え方は、英語の別の側面を示していると言えるだろう。但し、同じ非能動的表現ではあるが、存在的 *there* 構文は全てが場所を介しての捉え方という違いがある。そして後述するように、どのような概念化者によって捉えられているかという違いもある。

次に、二つの構文の違いを見ていきたい。(79)の例文は二つの構文のスコープの違いも表している。直示性をもたない“*it*”は典型的には人間を除くほぼあらゆるものを指示でき非常に指示幅が大きく、そこからもたらされる非境界制限性そして不明瞭性も大きい。一方、“*there*”はある程度の非制限領域性をもっているとはいえ、指示が場所限定され、かつ直示性があることからその性質は“*it*”よりはるかに弱い。直示性を持たず指示幅の大きい Impersonal *it* 構文が直示性を持ちかつ指示幅の狭い存在的 *there* 構文を含むことができる、それが(79)に現れている。

但し、両構文とも、程度の違いはあるが、領域には拡張が見られる。“*it*”は人間を指示し、“*there*”は非場所を指示する。従って、指示領域は両構文の最大の違いとは言えない。

二つの構文の最大の違いでかつ変わることが無いのが直示性の有無である。この直示性の有無は両構文の話し手の位置付けに大きく関わっている。“*it*”の最大限の非境界制限性には非直示性も含まれるのであろう。そこから Impersonal *it* 構文は特定されない話し手、顔の見えない話し手、最大限に観察主体的な話し手を持ち、そこから「一般化された概念化者」が導き出される。一方、直示性を持つ“*there*”には特定の話し手の存在が前提であり、その話し手に対応する聞き手も存在する。そこから存在的 *there* 構文の話し手は観察客体でもあり観察主体でもありうる特定の顔を持つ存在である。この二つの構文を使い分けることで、話し手はそのように自身の捉え方を示したいと考えられる。

二つの構文の話し手の位置付けが異なることは、両構文の話し手に共通して見られる事態の解説機能の程度の違いからも確かめられる。両構文が共通して話し手による事態の解説機能を示しているのは、おそらく二つの構文が情報構造を持っていることがその理由の一つであると考える。しかしながら、その機能は同等ではない。Impersonal *it* 構文においては、話し手の解説活動は積極的とは言えず、単に「AはBなのです。」という説明にとどまっている。これは顔の見えない不定な話し手に起因すると思われる。一方、存在的 *there* 構文には、聞き手の情報状況に細かく配慮をした積極的な解説行為を見ることができる。この現象は存在的 *there* 構文の話

し手が特定の顔の見える観察主体であることを示している。

この話し手の違いは Langacker (2011:213)の提言、“At present I can offer only the vague suggestion that *it* tends to be more abstract and more inclusive than *there*.”、Impersonal *it* が *there* に比べより抽象的でありかつ *there* を含んでいる、に一致する。「一般化された概念化者」が生まれる為には、大勢の「顔の見える概念化者」の集合が前提となり、その概念の集合体または抽象体が一般化された概念となる。従って、Impersonal *it* が存在的 *there* より抽象的であり包括的であるはずである。

二つの構文の話し手の立場が異なるということは、話し手が作り上げる “an abstract setting” 構築の動機づけにも違いがあるということなのではないだろうか。Impersonal *it* の “abstract setting” について、Langacker は “*it*”の最大限の非境界制限性および不明瞭性と説明している。しかし、“*there*”の非境界制限性と不明瞭性はさほど強いものではなく、拡張の動機付けには不十分である。

拡張の動機付けとして、本論では、参照点構造における指示焦点のシフトを提案したい。所格 “*there*”において、指示は場所であるが、直示的 “*there*”ではその場所に存在/出現する実体である。存在的 *there* 構文では探索領域/場面的枠組みへと指示の焦点がシフトしている。

焦点シフトは文法現象に深く関与していると、認知文法では考えている。Langacker (2008:69) は “Profiling figures crucially in the pervasive phenomenon known as **metonymy**. In a narrow sense, we can characterize metonymy as a shift in profile.”と焦点のシフトを狭義のメトニミーと定義している。そして、メトニミーは捉え方にも文法現象にも表れている。

“Construal”がテーマの Langacker (2019:141)では “The many aspects of construal will be considered under five broad headings: *perspective, selection, prominence, dynamicity, and imagination.*”と、捉え方の5つの局面を挙げている。その中の “*selection*” (pp.146-148)では、私たちが私たちの世界の全てを記述しなくてはならなかったら、逆に何も記述することはできず、全ての表現は何かを省略している。何を記述すべきか、何をプロファイルするかの選択の重要性について述べている。その “*selection*”の中でメトニミーは重要な項目として位置づけられている。そして “Metonymic construal is pervasive in lexicon and grammar.” (Langacker 2019:247)と、語彙そして文法にも広く行き渡っている現象であると主張されている (西村 2002:285-311)。

とするならば、“*there*”に見られる一連の焦点シフトを “abstract setting” への動機づけと見ることは十分に検討に値すると考える。

## 5. 結論

本論の目的は Langacker (2011:213)の「Impersonal *it* 構文と存在的 *there* 構文の関連は何か」という問いに対して、話し手と事態の捉え方に重点を置いた試案を提示することにあった。

本論では、指示的用法である外部/内部照応 “*it*”と所格/直示的 “*there*”の性質の分析結果をベースとして二つの構文の特徴を検討するという方策を用いた。語彙と文法は連続体を成すという認知文法の考え (Langacker 2000/2005/2008)に沿うアプローチである。そして、考察において



は、指示的用法の基本的性質のみならず、有標用法に見られる特徴にも注目することとした。

2 節では、外部/内部照応 “*it*” の基本的性質として、①広指示定性・②非直示性・③非人間性を示し、①と②によって非境界制限性及び不明瞭性がもたらされることを確認した。加えて、内部照応 “*it*” にはトピック性があることも示した。次に、有標である人間指示用法の分析を行い、他者として自身を観察する姿、そして顔の見えない大勢の一人としての姿を話し手に見出した。この姿が Impersonal *it* 構文の「一般化された概念化者」へと結びついていると提案した。

Impersonal *it* 構文に特徴的な述語の分析は、この構文には行為表現そして行為者表現は適さず、逆に非叙実形容詞・動詞がこの構文のみに可能であり、かつ事態を一コマの静止画様態に提示するという特徴があることを示した。非能動的な事態の捉え方である。

3 節では所格/直示的 “*there*” を分析し、基本的性質として①指示定性、②直示性、③場所性の 3 点を示した。さらに有標である非場所指示用法には事柄の流れの一点または考えの一部分を切り取り、その場面を静止画のように示すという特徴があることを説明した。

次いで、“*there*” の参照点構造を分析し、指示焦点に一連のシフトがあることを明らかにした。所格 “*there*” では、参照点は話し手であり、ターゲットは “*there*” で指示された場所である。しかし、直示的 “*there*” では、ターゲットは場所に存在または出現する実体であり、場所自体は背景化している。存在的 *there* 構文においては、“*there*” の場所指示はさらに背景化が進み、探索領域を示す場面的枠組みへと変化している。参照点は叙述内容により話し手または事態参与者である。

この場面的枠組みが、Langacker が主張している “*abstract setting*” と考えられ、非境界制限性及び不明瞭性の強さが十分ではない “*there*” の場合には、この一連の指示焦点シフトが “*abstract setting*” への動機付けになるという提案を行った。

“*there*” の直示性は存在的 *there* 構文の話し手に Impersonal *it* 構文とは異なる性質を与えている。話し手は叙述内容により観察客体と観察主体の両方となることができるが、特定の顔を持つ観察主体である。それは聞き手の情報状況を細やかに踏まえた上での聞き手への積極的な解説活動からも確かめられた。「場所」を探索領域とする存在的 *there* 構文では導入実体も「場所にある」として捉えられ、静止的・非活動的に示されていることが、ステージレベルの形容詞の生起そして抽象的実体の導入から観察された。非能動的な事態の捉え方である。

4 節では、Impersonal *it* 構文と存在的 *there* 構文を比較した。その結果、次の 4 点を提案した：

- ① 二つの構文は各々の指示的用法の意味を受け継いでいる。
- ② 二つの構文には事態の非能動的捉え方が共通して見られる。
- ③ 二つの構文の話し手は自身を異なった立場の概念化者として捉え表現していること。
- Impersonal *it* 構文：顔の見えない大勢の観察者の一人としての観察主体＝一般化された概念化者
- 存在的 *there* 構文：観察客体/特定の顔を持つ観察主体
- ④ 指示的 “*there*” から存在的 *there* 構文の “*abstract setting*” への変化には指示焦点のシフトというメトニミー的動機づけがあると考えられる。

“On the subject of impersonals”を表題とする Langacker (2011)の 5.2 節のタイトルは “Putting the pieces together”である。「抽象的場面設定」そして「一般化された概念化者」等の概念は目に見えるものではない。これらの理論的構築物の妥当性を証明するためには、様々な細かい言語事象を丁寧に繋ぎ合わせる試みが求められる。本論はその試みの一つであり、さらに考察を続けたい。

## 参考文献

- Ariel, Mira (1988) “Referring and accessibility.” *Journal of Linguistics* 24. pp.65-87.
- Bennett, Phil (2014) “Langacker’s Cognitive Grammar.” *The Bloomsbury Companion to Cognitive Linguistics*. London/New York: Bloomsbury Academic. pp.29-48.
- Birner, Betty and Gregory Ward (1993) “There-Sentences and Inversion as Distinct Constructions: A Functional Account.” *Proceedings of the Nineteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. pp.27-39.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Collins, Chris and Paul M. Postal (2012) *Imposters: A Study of Pronominal Agreement*. Cambridge/Massachusetts: The MIT Press.
- Dixon, R. M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford/New York: Oxford.
- Downing, Pamela A. (1996) “Proper Names as a Referential Option in English Conversation.” In Barbara Fox (ed.) *Studies in Anaphora*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.95-143.
- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Fillmore, Charles J. (1977) *Lectures on Deixis*. CSLI Publications.
- Gardell, Laure and Sandrine Sorlin (2015) “Chapter 1 Personal pronouns – An exposition.” In Gardelle, Laure and Sandrine Sorlin (eds.) *The Pragmatics of Personal Pronouns*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.1-23.
- Gundel, Jeanette, K. Nancy Hedberg and Ron Zacharski (1993) “Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse.” *Language* Volume 69, Number 2. pp. 274-307.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館書店。
- 伊藤徳文 (2005) 「第4章 英語 There 構文の機能とその情報構造」『談話情報と英語構文解釈』東京：英宝社。
- 今井邦彦 (1995) 『英語の使い方』東京：大修館書店。
- Kenkyusha Online Dictionary 『新英和大辞典』東京：研究社。
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1971) “Fact.” In Danny D. Steinberg and Leo A. Jakobovits (eds.) *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. London/New

- York: Cambridge University Press. pp. 3345-369.
- Kuno, Susumu (1972) "The Position of Locatives in Existential Sentences." *Linguistic Inquiry* 2. pp.333-378.
- Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki (1977) "Empathy and Syntax." *Linguistic Inquiry* Vol. 8, No. 4. pp. 627-672.
- 久野暉・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味』東京：開拓社.
- Langacker, Ronald W. (1985) "Observations and Speculations on Subjectivity." In John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax: Proceedings of a Symposium on Iconicity in Syntax in Stanford*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp.109-150.
- Langacker, Ronald W. (1990) "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1-1. pp.5-38.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* Volume II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1996) "Conceptual Grouping and Pronominal Anaphora." In Barbara Fox (ed.) *Studies in Anaphora*. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins Publishing Company. pp.333-378.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2002) *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2005) "Construction Grammars: Cognitive, Radical, and less so." In Francisco José Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp.101-159.
- Langacker, Ronald W. (2006) "Subjectification, grammaticization, and conceptual archetypes." In Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Berlin/New York. Mouton de Gruyter. pp.17-40.
- Langacker, R. W. (2007) "Constructing the meanings of personal pronouns." In Radden Günter, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg and Peter Siemund (eds.) *Aspects of Meaning Construction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.171-187.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2011) "On the subject of impersonals." In Brdar, Mario, Stefan Th. Gries and Milena Žic Fuchs (eds.) *Cognitive Linguistics Convergence and Expansion*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.179-217.
- Langacker, Ronald W. (2019) "Chapter 6 Construal." In Dąbrowska, Ewa and Dagmar Divjak (eds.) *Cognitive Linguistics Foundations of Language*. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton. pp.140-166.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Marmaridou, Sophia S.A. (2000) *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 中島平三 (編) (2001) 『英語構文辞典』東京：大修館書店.

- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造』東京 : 東京大学出版会.pp.285-311.
- 奥津文夫 (2000) 『日英ことわざ比較文化』東京 : 大修館書店.
- レイコフ、ジョージ(George Lakoff)(1993) 池上他 (訳) 『認知意味論』(*Women, Fire, and Dangerous Things*) 東京 : 研究社.
- Schegloff, Emanuel A. (1996) “Some Practices for Referring to Persons in Talk-in Interaction: A partial Sketch of a Systematics.” In Barbara Fox (ed.) *Studies in Anaphora*. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins Publishing Company. pp.437-485.
- 鈴木孝夫 (1996) 『教養としての言語学』東京 : 岩波新書.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京 : 研究社.
- Talmy, Leonald (1988) “Force Dynamics in Language and Cognition.” *Cognitive Science*12. pp.49-100.
- Talmy, Leonard (2017) *The Targeting System of Language*. Cambridge/London: The MIT Press.
- Thavenius, Cecilia (1983) *Referential Pronouns in English Conversation*. Lund: CWK Gleerup.
- Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction*. London/New York: Longman.
- 富澤直人 (2002) 「第 9 章 There 構文」中村捷・金子義明 (編) 『英語の主要構文』東京 : 研究社.pp.81-90.
- 湯本久美子 (2013) 「"Impersonal It 文” の a generalized conceptualizer」『東京大学言語学論集』第 34 号.東京大学.pp. 247-273.
- 湯本久美子 (2014) 「“It 分裂文”の既成事実効果・個人的責任回避機能」『東京大学言語学論集』第 35 号.東京大学.pp. 297-324.
- 湯本久美子 (2015) 「話し手・聞き手を指示する英語表現—主体性と客体性から—」『東京大学言語学論集』第 36 号.東京大学.pp.185-217.
- 湯本久美子 (2017) 「It の連続体:外部照応 it から It 分裂文まで」『東京大学言語学論集』第 38 号.東京大学. pp.321-352.
- 湯本久美子 (2019) 「There 構文の捉え方」『東京大学言語学論集』第 41 号電子版.東京大学.pp.e47-e83.
- Wales, Kathleen (1980) “ ‘Personal’ and ‘Indefinite’ Reference: The users of the Pronoun ONE in Present-day English.” *Nottingham Linguistic Circular*. Volume 9, Number 2 December.pp.93-117.
- Wales, Katie (1996) *Personal Pronouns in Present-day English*. Cambridge/New York /Melourne/Madrid/Cape Town/Singapore/Sao Paulo: Cambridge University Press.

#### 例文出典

- Belton, Christopher (2012) 『日本人のための教養ある英会話』東京 : DHC.
- Christie, Agatha (1987) *Sparkling Cyanide*. London: Collins.

# The Speaker and the Construal of the Impersonal *It*-construction and the Existential *There*-construction

Kumiko Yumoto

yumoto@ccs.aoyama.ac.jp

**Keywords:** Impersonal *it*-construction, Existential *there*-construction, Speaker, Construal, Abstract setting

## Abstract

The purpose of the present paper is to describe the relationship between the impersonal *it*-construction and the existential *there*-construction, both of which are said to afford an abstract setting according to Langacker (1991/2000/2011). In order to identify the speaker and to understand the construal of the constructions, we will firstly define the non-marked and marked features of the exophoric/endophoric “it” and the locative/deictic “there.” We will then go on to analyze the distinctive features of the constructions. Finally, we will suggest the following: 1) impersonal *it* and existential *there* display the same meanings they have in their referential uses; 2) the impersonal *it* and existential *there*-constructions share the same non-active construal of events; 3) the impersonal *it*-construction has a faceless observer/generalized conceptualizer while the existential *there*-construction has a particular observer, and 4) there is a possibility that the change of referential “there” to an abstract setting is motivated by a chain of shifts in profile of “there.”

(ゆもと・くみこ 青山学院大学)